

十数年前、作家五木寛之さんのエッセイの中に、

「優しいだけでは生きてゆけない。だが、優しくなくては生きている値打ちがない。」

という一節が引用してある本を読みました。

この一節を目にしたとき、「そうなんだ。その通りなんだ。」と深く感銘し、心に強く響いてきました。以来、ずっとこの一節が、事あるたびにあらわれ、「優しさ」とは、生きていく中でこういう位置をも占めているんだと思ってきました。

しかし、ここ数年、この「優しさ」という言葉に少しひっかかりを感じるようになってきました。「優しさ」って一言で言うけれど、一体何なのだろうと。

そう思うと、十数年前、あれほど強く感銘をうけ、素直にうなづけた一節が、時を重ねた今、考えさせられる一節へと変わってきました。

「優しい」という言葉を何のこだわりもなく、疑問も持たず、深く考えてみることもなく受け止めてきたのですが、「優しい」という言葉を耳にするたびに、その優しさって一体どういうことを言うのかという思いが深まりを増すようになってきました。

以前読んだ一節の文が変わったのではなく、自分のあり方が変わったことによって、この文の放つ意義が変わって受け止められるようになってきました。

このようなことは文や言葉だけに限らず、私たちの日々の生活、暮らしの中にでも他にいろいろあると思います。

自分が変わることによって、同じ事でもそれは違う面を見せ、そしてまた自分に向きあわせてくれる・・・。

十数年前に出逢った一文が今そういう思いを私に与えていてくれています。